

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：松井 佑樹（教育心理学コース）

■ 研究題目
大学生における説明的文章の読解観が読解活動に及ぼす影響
■ 研究代表者・分担者（氏名、コース）
松井 佑樹（教育心理学コース・博士課程前期2年）（代表者）
■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）
1. 問題と目的 <p>私たちは説明的文章の読解を通じて、文章に書かれている内容を学習することがある。根本（1994）や水川（1994）は、説明的文章を「事実関係の論理的な結びつきによって、読者にそのテーマに関する情報や、著者の主張を伝える文章である」と定義している。この定義から、説明的文章における適切な読解とは「文章内の個々の情報を適切に位置づけ、最終的に著者の主張を読み取ること」と言える。</p> <p>文章の読解を通じて、文章に関する心的表象（読解表象）が形成される。これに関して、Kintsch（1994）はテキストベースと状況モデルの2つのレベルを想定している。まず、テキストベースとは、文章中に示された命題の意味的・修辭的な構造を表象する段階を指す。次に、状況モデルとは、文章に述べられている内容を読者の知識をもとに精緻化・統合化する段階を指す。読者が状況モデルを形成できると、文章に記載されていないことも推論できるようになるため、精緻な状況モデルの形成を目標とした文章読解は望ましいことである。</p> <p>この状況モデルの形成を説明する際、文章理解に関する心理学的研究では、スキーマ理論がよく用いられている（たとえば、Carrell（1983）やRumelhart and Ortony（1977）など）。スキーマ理論とは、入力された情報が共通の特性をもとに抽象化されたスキーマ（Schema）と呼ばれる知識構造へ統合されると考える理論のことである。この理論によると、理解のプロセスを「すべての入力は何らかの既存のスキーマに照らし合わされ、そのスキーマのすべての側面が入力情報と適合しなければならない」と仮定している。この理論における仮定とKintsch（1994）が想定する読解表象との関係を考えてみると、ある文章を理解するために状況モデルを構築するとき、学習者はその文章に適</p>

したスキーマを活性化させ、そのスキーマが文章を理解するのに適しているのか評価を行う。評価の結果、スキーマが文章を説明するのに適していると判断されたとき、私たちはその文章に関する状況モデルを形成できたと想定できる。

以上のようなプロセスを通じて、文章読解時に適切なスキーマを活性化させ、状況モデルを構築することもあれば（例えば、Bransford and Johnson (1972) の研究）、不適切なスキーマを活性化させ状況モデルを構築する場合もある。舛田 (2009, 2010, 2011, 2017, 2018) は、日本人大学生による日本語の文章読解を対象に学習者がどの程度文章を理解しているのか検討してきた。その結果、当該文章には記述の無い価値的な内容を過剰に読み取る「価値的読解」が確認されている。そして読解を価値的に方向づける枠組みを「価値的読解スキーマ (Values Reading Schema) ; VRS」と舛田 (2017) は名付けている。価値的読解は自身の知っていることを再確認した読解に過ぎないため、前述のような説明的文章の読解による学習を達成することができない。したがって、価値的読解を抑制する方法を検討することは教育的に意義のあることと言えよう。

今後、価値的読解の抑制方法を開発するために、なぜ価値的読解が生じるのか検討する必要がある。これに関して、舛田 (2017) は価値的読解が生じる条件として、「文章側の要因」「読者側の要因」「状況的要因」の3要因があると指摘している。したがって、これら諸要因とスキーマ理論における仮定を踏まえ、価値的読解の生起プロセスを検証する研究を行えば、価値的読解のメカニズムを解明できるだろう。

しかし、前述のような研究を行うために、一つ明らかにしなければならないことがある。それは「研究参加者の教示文の解釈」である。先行研究では、価値的読解を自由記述課題で測定するために、「自分の考えを含めずに記述すること」を求めそれを意図した教示文を作成してきた。しかし、研究参加者がその教示文を研究者の意図通りに解釈し自由記述課題に取り組んでいたのか確認されていない。もし、価値的読解をした学習者が「自分の考えも含めて説明文を読んだ」と認識しているならば、意図的に価値的読解をしているため、教示文を修正しさえすれば価値的読解を抑制できると考えられるだろう。逆に、教示文の解釈が一致しているにもかかわらず価値的読解をしていることが明らかになった場合、教示文を修正しさえすれば価値的読解を抑制できるという仮説が棄却される。今後どのような抑制方法を開発すべきか考えるためにも、研究参加者の教示文の解釈について調べることは重要であると言える。

このように、2通りの価値的読解の生起パターンが考えられるが、両者に共通して影響を与える要因は一体何か。その要因として、「学習者が説明文を読むということのように認識しているのか (以下、読解観)」が影響していると考えられる。たとえば、「自分の知識や考えを積極的に使って文章を読むことが大切である」と認識している学習者がいたとき、文章に記述されていないこと自身の知識や考えによって理解しようと読解活動をするだろう。もしも、このような仮説が成立するならば、「価値的読解をす

る学習者も『自分の知識や考えを積極的に使って文章を読むことが大切である』と認識している傾向があるため、VRSを使用して文章読解をするだろう」という想定が可能となる。

ここで具体的な読解観を仮定するために、本研究では、Jones and Davies (1983) が想定している説明文の読解を通じて行われる学習の際の「テキスト観」に依拠する。テキスト観とは、学習の対象としてのテキスト利用に関する立場のことである。Jones and Davies (1983) はテキスト観として、①TALO(Text As Linguistic Object)、②TAVI(Text As a Vehicle for Information)、③TACO (Text As Critical Object) の3つあると説明している。TALOとは、テキストを「テキストは言語それ自体を学ぶために用いられるものである」という立場のテキスト観を指す。そのため、このテキスト観では、テキストの内容よりもテキストの統語構造や未知語の理解をすることが読解の目的となる。次に、TAVIとは、テキストを「テキストは情報を運ぶもの(情報の乗り物)である」という立場のテキスト観である。そのため、このテキスト観では、本や新聞記事などを読んで知りたい情報を得ることが読解の目的となる。最後に、TACOとは、テキストを「テキストそれ自体が検討の対象である」という立場のテキスト観である。この読解観は上記2つの読解観とは異なり、テキストから作者の意図を適切に読解することを目的とするのではなく、全ての読者がテキストから新しい意味を創造することを目的としているため、各自の立場で文章の読解を行うことが許されているテキスト観だと言える。以上で説明したテキスト観を参考にすると、想定される読解観として、①説明文の読解を「言語学習の材料と捉える」読解観(以下、TALO的読解観)、②説明文の読解を「情報獲得の手段として捉える」読解観(以下、TAVI的読解観)、③説明文の読解を「内容を批判的に検討する」読解観(以下、TACO的読解観)が考えられるだろう。そして、整理した読解観と価値的読解の関連について考えると、TACO的読解観を強く抱いている学習者は価値的読解をしやすい傾向があると予想できるだろう。

以上のことを踏まえ、本研究では、教示文の解釈が読解活動及ぼす影響と読解観が読解活動に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。そのために、文章を逸脱なく読解した人(自由記述課題に適切に回答した人、以下「逸脱なし」と呼ぶ)と価値的読解や、価値的読解ではないが不適切な読解をした人(自由記述課題を不適切に回答した人、以下「逸脱あり」と呼ぶ)ごとに教示文の解釈や読解観の違いを比較検討する。

仮説

- ① 教示文の解釈が読解活動に影響を及ぼすだろう。
- ② 読解観は読解活動に影響を及ぼすだろう。

結果の予想

- ① 価値的読解を行っている者は意図的に自分の考えも含めて書いているだろう。
- ② TACO 的読解観を強く抱いている学習者は価値的読解をしやすだろう。

2. 方法

2.1. 研究参加者・本調査期日

研究参加者は宮城県の私立大学 A 大学の大学生 42 名である。調査は 10 月中旬の講義時間中に実施した。

2.2. 本調査の概要

本調査は 2 つのセッションに分かれ、両セッションは連続的に実施した。第 1 セッションでは、小冊子を配布し、文章の読解と文章に関する質問（自由記述課題）への回答をさせた。全員が質問に答え終えたことを確認してから小冊子を回収し、ただちに第 2 セッションへ移った。第 2 セッションでは、A4 判の回答用紙を配布し、「教示文の解釈」と『「説明文を読むこと」をどのように認識しているのか』に関する質問への回答をさせた。全員が質問に答え終えたことを確認してから、回答用紙を回収した（Figure 1 参照）。実験に要した時間は 30 分程度である。

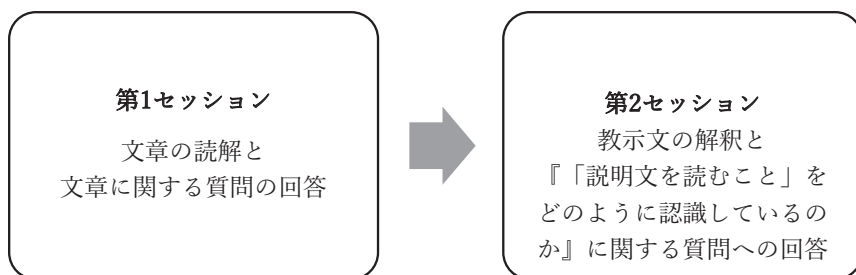


Figure 1 本調査の流れ

2.3. 実験で使用した小冊子（第 1 セッション）の構成

小冊子は、文章と質問の 2 部分によって構成された。本調査で使用した文章は、先行情報と主材料文の 2 部分から構成されていたが、先行情報は本研究とは別の目的で使用した。したがって、以下では本研究の目的に関係する主材料文のみ説明を行う。

主材料文 主材料文として舛田・工藤（2021）で使用された文章を使用した。「電車内の携帯電話の使用に関する記事（朝日新聞 2008 年 2 月 6 日付，1198 字）」に編集を加えて作成したものである。文字数は 1,074 字である（Appendix 1 を参照）。

説明文の内容・構成は以下の通りである。

1. 電車内等で心臓ペースメーカー（Cardiac pacemaker:以下 CPM）に配慮するた

めに、携帯電話の電源を切るよう繰り返し掲示や放送がなされ、患者の不安も募るとい
う記者による現状の解説。

2. CPM 装着者から携帯への不安の声があるが、日本心臓ペースメーカー友の会では、携帯電話の電波は影響しないとしており、患者自身も携帯を使用しているという事実の紹介。

3. 総務省による CPM と携帯電話との安全距離 22cm とその決定の根拠や現機種ではほとんど影響がないという事実の紹介

4. 携帯電話よりもその他の家電品等の方が悪影響なものがあるという専門家の意見の紹介。

以上の内容から、主材料文の主旨として「一般的に、携帯電話の電波が CPM に影響すると考えられているが、実際に携帯電話の電波は危険ではない。その理由として、現在の機種には電波吸収フィルターがついていること、CPM と携帯電話との安全距離が必要なのは古い機種であることが挙げられる。」となる。

文章に関する質問 価値的読解が生起するかどうか把握する手段として、読者自身に「文章の主旨」を自由記述させた。具体的な教示は以下の通りである。なお、具体的な教示の中で「文章Ⅱ」という表現があるが、これは「主材料文」を指す。

『いま読んでもらった文章Ⅱは、私たちに説明や解説をしたり、何か情報を知らせたりするための文章です。それでは、文章Ⅱは全体として、どういうことを説明・解説・知らせようとしているとあなたは読みとりましたか。なるべく詳しく書いてください。』

2.4. 実験で使用した小冊子（第2セッション）の構成

教示文の解釈(自分の考えを含めたか否か) 教示文の解釈を確認するために、主材料文に関する質問を答えるときに自分の考えを含めて回答したか否か、について、「はい」「いいえ」の2件法で回答させた（Appendix 2を参照）。

読解観(説明文を読むことをどのように認識しているのか) 読解観を測定するために、6項目を提示し以下の教示を行った（Appendix 2を参照）。「あなたが日頃、説明的文章を読むときに大切にしていることは何ですか。以下の項目を読んで、もっとも当てはまる選択肢の数字に○をつけてください」。以上の質問に対し、5つの選択肢（1...あてはまらない、2...あまりあてはまらない、3...どちらでもない、4...ややあてはまる、5...あてはまる）を提示し回答させた。

TALO に該当する項目は「1. 自分の知らなかったことばを見つけること」と「4. 筆者が文章中で使用している表現方法を学ぼうとすること」の2項目である。TAVI に該当する項目が「2. 文章に書かれていることを正確に把握すること」「6. 文章に書かれていることから、自分の知識の正しさを確認すること」の2項目である。TACO に該当する項目は「3. 文章には直接書かれていない筆者の伝えたいことを想像すること」「5. 文

章に書かれていることをヒントにして自分の考えを広げること」の 2 項目である。

2.5. 倫理的配慮

倫理的配慮をするために、研究参加者に対して、回答は自由であること、不快に感じた場合はいつでもやめられることを口頭で明示的に伝えた。後日、調査結果の概要をまとめたスライドを作成し、授業担当者がその解説を行った。

3. 結果

3.1. 自由記述課題の分類

回答に不備のあった 2 名を除いて、研究参加者 40 名のデータを分析対象とした。自由記述課題を分析するために、まず「逸脱なし」「逸脱あり」の観点から分類した。

次に、「逸脱なし」と「逸脱あり」のカテゴリー内で分類した。「逸脱なし」のカテゴリーを、「文章の主旨を適切に把握した者（適切）」「先行情報と主材料文の混同（混同）」「文章内容の誤解（誤解）」の 3 つに整理した。また、「逸脱あり」のカテゴリーも、「価値的な内容を記述している（価値的読解）」「価値的ではないが、逸脱した内容を記述している（価値的読解ではないが、不適切な読解）」の 2 つに整理した。

その後、実験実施者と実験実施者以外の者が独立に判断し、不一致の部分を合議によって調整した。（一致率 87.0%）。その結果を Table 1 に示す。また、自由記述課題の回答例は Appendix 3 に示した。

Table 1

自由記述課題における各カテゴリーの人数比率

	逸脱なし			逸脱あり	
	適切	混同	誤解	価値的読解	価値的読解ではないが、不適切な読解
人数 (n=40)	23	2	1	12	2

※数値は人数を表す。

3.2. 教示文の解釈と自由記述課題の関連

教示文の解釈が自由記述課題に影響しているのかどうかを確認するために、「逸脱なし」に該当した者と「逸脱あり」に該当した者で回答の違いを見た。具体的に、筆者の考えだけ書いたと回答した人（32 名）と自分の考えも含めて書いたと回答した人（8 名）の自由記述課題の関連を検討した。その結果をまとめたのが Table 2 である。価値的読解をした 12 名中、7 名が「自分の考えだけを書いた」と回答し、5 名が「自分の考えも含めて書いた」と回答した。

Table 2

教示文の解釈と自由記述課題の関連

	逸脱なし			逸脱あり	
	適切	混同	誤解	価値的読解	価値的読解ではないが、不適切な読解
筆者の考えだけ書いた (n=32)	22	1	1	7	1
自分の考えも書いた (n=8)	1	0	1	5	1

※()内の数字は人数を表す。

3.3. 読解観と自由記述課題の関連

逸脱なしが 26 名、逸脱ありが 14 名となったため、この 2 群の間に違いがあるのか検討した。質問項目 6 項目における群ごとの得点の違いを Table 3 にまとめた。得点の違いが有意であるのか、平均値の差の検定を行ったところ、「文章に書かれていることをヒントにして自分の考えを広げること (TACO)」においてのみ有意差が見られた ($t(38)=2.22, p<.05$)。

Table 3

読解観と自由記述課題の関連

質問項目	逸脱なし (n=26)	逸脱あり (n=14)
自分の知らなかったことばを見つけること (TALO)	2.92 (1.16)	3.36 (1.22)
筆者が文章中で使用している表現方法を学ぼうとすること (TALO)	2.92 (1.16)	3.00 (1.47)
文章に書かれていることを正確に把握すること (TAVI)	4.42 (0.64)	4.21 (0.89)
文章に書かれていることから、自分の知識の正しさを確認すること (TAVI)	3.12 (1.24)	3.43 (1.28)
文章には直接書かれていない筆者の伝えたいことを想像すること (TACO)	3.54 (1.10)	3.71 (1.38)
文章に書かれていることをヒントにして自分の考えを広げること (TACO)	3.31 (0.97)	4.00 (0.88)

※数字は平均値、()は標準偏差、数値が高いほどその読解観を強く認識していることを示す。

4. 考察

4.1. 結果のまとめ

本研究の目的は、第 1 に価値的読解をした学習者が研究実施者と異なる教示文の解釈をしているのか確認すること、第 2 に読解観が価値的読解の生起に影響を及ぼすことを確認することであった。

目的に關した結果をまとめると以下の通りになる。第 1 の目的に關して、教示文の解

釈の確認をした質問と自由記述課題の関連を検討したところ、逸脱ありに該当した 14 名のうち 8 名が「筆者の考えだけを書いた」と回答していることから、予想は確かめられなかった。ここから、先行研究でこれまで問題視されてきた「価値的読解が生じたのは教示文の解釈が研究実施者と研究参加者で異なっていたため」という可能性は否定された。そして、VRS が価値的読解を説明する概念として有用であることが改めて確かめられた。この結果から、価値的読解は教示文を修正しさえすれば抑制できる現象ではないことが示唆される。

第 2 の目的に関して、読解観と自由記述課題の関連を検討するために、逸脱なしと逸脱ありで違いを見たところ、「文章に書かれていることをヒントにして自分の考えを広げること」という TACO 的読解観の項目においてのみ有意差が見られたため、予想が確かめられた。問題と目的で述べたように、TACO 的読解観を抱く学習者はテキストから自分なりに新しい意味を創造して読解する傾向がある。本研究で逸脱ありに該当した学習者もテキストから新しい意味を創造させようと VRS や自分の知識を使用した結果、価値的読解や価値的読解ではないが、不適切な読解をしたことが考えられる。

4.2. 今後の課題と展望

本研究の課題について触れたい。一つは、読解観を測定した尺度の信頼性や妥当性に限界がある点である。本研究では、読解観を測定するために 6 項目を使用した。6 項目に設定した理由として、研究参加者の負担を配慮するためであった。確かに、項目数を減らしたことで負担を最小限にして研究を実施することはできた。しかし、2 項目ずつで 3 つの読解観を測定したことで、信頼性や妥当性を保証することが難しくなってしまった。今後、項目数を増やして読解観を測定する尺度を作成し、尺度の信頼性や妥当性を検討する必要があるだろう。また、研究結果の一般化可能性に限界があることも課題の一つである。1 回の調査に基づく結果であることと 40 名という少ない研究参加者数から得られた結果であったことを踏まえると、結果にある程度の一般性を持つのかについて断言できない。したがって、追試研究やより規模の拡大した調査を通じて、今回の結果の再現性について確認していく必要がある。

以上のように、残された課題はあるものの、価値的読解のような不適切な読解をする学習者は適切な読解をする学習者と異なる読解観を強く抱いている可能性があることを示せた点に本研究の意義があるだろう。今後はその読解観を規定する要因を明らかにすることができれば、価値的読解の生起プロセスが明らかになるだけでなく、その抑制方法も検討できるようになるだろう。

付 記

本調査にご協力いただいた A 大学の学生のみなさまに記して感謝の意を表します。

文 献

- Bransford, J. D. and Johnson, M. K. (1972). Contextual prerequisites for understanding: Some investigations of comprehension and recall. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 11 (6), 717-726.
- Carrell, P.L. and Eisterhold, J.C. (1983) Schema Theory and ESL Reading Pedagogy. *TESOL Quarterly*, 17, 553-573. <https://doi.org/10.2307/3586613>
- Johns, T., & Davies, F. (1983). Text as a vehicle for information: The class-room use of written texts in teaching reading in a foreign language. *Reading in a Foreign Language*, 1 (1), 1-19.
- Kintsch, W. (1994). Text comprehension, memory, and learning, *American psychologist*, 49(4), 294-303.
- 舛田弘子 (2009). 説明的文章における道徳的読解スキーマ(MRS)における文章依存性について, 教授学習心理学研究, 5, 1-10.
- 舛田弘子 (2010). 道徳的読解スキーマ(MRS)に影響を受けた読解と読解ストラテジーとの関連について—説明的文章を題材に—, 札幌学院大学人文学会紀要, 87, 53-66.
- 舛田弘子 (2011). 道徳的読解スキーマ(2011)に影響を受けた読解の生起に関連する要因の検討—説明的文章の結論に対する適切性判断を題材に—, 教授学習心理学研究, 7, 1-11.
- 舛田弘子 (2017). 説明的文章の「道徳的誤読」について—CRの知見によるMRS概念の再検討—, 札幌学院大学総合研究所紀要, 4, 23-36.
- 舛田弘子 (2018). インタビューによる読解表象の把握の試み—読解方略は読者によってどのように用いられたのか—, 札幌学院大学人文学会紀要, 103, 29-45.
- 舛田弘子・工藤与志文 (2021). 不適切な読解表象の形成における「想念の侵入」について—説明的文章の読解を対象に— 教育心理学研究, 69(3), 241-253. <https://doi.org/10.5926/ijep.69.241>
- 水川隆夫 (1992). 説明的文章指導の再検討—到達目標・到達度評価論の立場から— 国語教育叢書 44 教育出版センター.
- 根本今朝男 (1994). 説明的な文章の類型と特徴 飛田多喜雄・野地潤家 (監修) 渋谷孝 (編集・解説) 国語科理解教育論(4)説明文教材指導論 I 国語教育基本論文集成 14 (pp.56-66) 明治図書.
- Rumelhart, D.E., & Ortony, A. (1977). The representation of knowledge in memory. In R.C. Anderson, R.J. Spiro & W.E. Montague (Eds.), *Schooling and the acquisition of knowledge* (pp. 99-135). Hillsdale, NJ: Erlbaum

Appendix 1 主材料文

これから文章を読んでください。文章は「Ⅰ(先行情報を指す)」と「Ⅱ(主材料文を指す)」から構成されています。

文章を読み終わった後、文章に関する質問をしますので、しっかり読んでください。質問に答える際、もどって文章を見なおしてもかまいません。

(本文)

「優先席付近では携帯電話(スマートフォンを含む)の電源をお切り下さい。それ以外の場所では、マナーモードに設定の上、通話をご遠慮ください」。電車内ではこんなアナウンスや電光掲示が流れています。

関東では京王電鉄が2000年夏から始め、2003年、大半の社が一齐に導入したとされ、全国的にも広がっています。心臓ペースメーカーなどを装着した不整脈患者を、携帯電話の電波から守るのが目的です。

車内でこれを毎日聞かされると、携帯電話は相当危険だと思えてきます。それを気にせず、優先席で携帯画面を見ている若者もいるので、患者の不安もつりそうです。

2007年6月に東京で開かれた「日本心臓ペースメーカー友の会」総会での出来事です。

ある出席者が「外出のたびに『ケータイ包囲網』に身の危険を感じている」と新聞に投書したそうです。それを聞いた座長の医師が「これまで総会で何回も言っているように、携帯電話はペースメーカーに影響しません」と断言しました。

患者でもある日高進・副会長は、これについて以下のように説明しています。

「総務省は「携帯電話はペースメーカーから22cm離す」という指針を出しています。実はそれが必要なのは古い機種だけで、(2012年でサービス終了。現在は全く使われていません)。最近の機種では影響はありません。現に、多くの患者が自ら携帯電話を使っています。」

ペースメーカーなどの医療機器を販売する会社の豊島健・テクニカルフェローは、総務省の指針のもとになる調査を担当してきました。

「22cmは、駅のホームの黄色いラインのようなもの」と豊島さんは言います。ラインを少し出たからといって、即危険があるわけではないのだそうです。

以下は豊島さんの話です。

「携帯は電源を入れておくと、時々電波が出ます。基地の少ない田舎は電波が強く、都市部は弱いです。そして、断続的に電波が出るメールの方が、会話よりも、電波の影響は大きいです。」

この“22cm”は、影響を受けやすい古い機種に最大の電波をあてる最悪の条件下で設定したものです。

その影響も瞬間的に脈が乱れるだけで、離れば元に戻ります。さらに現在の機種は電波吸収フィルターが付いていて、全く影響ありません。日本のように注意を呼びかけている国は聞いたことがないのですが...」

豊島さんによると、日常生活でペースメーカー類に影響が大きいのは、むしろ万引き防止用の電子商品監視装置と、電磁調理器のIH炊飯器だそうです。炊飯器は、とくにふたを開けた時の電波が強いということです。

内容を理解できたと思ったら、別紙の質問に回答してください

Appendix 2 第2セッションで使用した回答用紙

文章に関するアンケート

学籍番号 ()

質問1. 「文章Ⅱ」に関する質問内容は以下の通りでした。

いま読んでもらった文章の「Ⅱ」は、私たちに説明や解説をしたり、何か情報を知らせたりするための文章です。それでは、本文は全体として、どういうことを説明・解説・知らせようとしているとあなたは読みとりましたか。なるべく詳しく書いてください。

この質問では「あなたの考え」ではなく「文章を書いた筆者の考え」を書いてもらうつもりでした。

そのことを理解してあなたは質問に答えましたか。以下の選択肢のうち、当てはまる選択肢の数字に○をつけてください。

1. はい（筆者の考えだけを書いた）
2. いいえ（自分の考えと筆者の考えを書いた）

質問2. あなたが日頃、説明的文章を読むときに大切にしていることは何ですか。以下の項目を読んで、もっとも当てはまる選択肢の数字に○をつけてください。

	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	あてはまる
1. 自分の知らなかったことばを見つけること	1	2	3	4	5
2. 文章に書かれていることを正確に把握すること	1	2	3	4	5
3. 文章には直接書かれていない筆者の伝えたいことを想像すること	1	2	3	4	5
4. 筆者が文章中で使用している表現方法を学ぼうとすること	1	2	3	4	5
5. 文章に書かれていることをヒントにして自分の考えを広げること	1	2	3	4	5
6. 文章に書かれていることから、自分の知識の正しさを確認すること	1	2	3	4	5

アンケートは以上です。

Appendix 3 自由記述課題の具体例

適切

・最近のスマートフォンの機種は電波吸収フィルターがついており、心臓ペースメーカーなどを装着した不整脈患者に対する影響がほとんどなく、電源を切らなくてもよいのではないか、ということを知らせている。また日常生活で影響が大きいのは、万引き防止の電子商品とIH炊飯器であると知らせている。

・携帯電話の電波は心臓ペースメーカーなどを装着している不整脈患者に影響を与えるものだと考えられているが、現在の携帯電話は電波吸収フィルターがついているため、影響が出ることはない。携帯電話よりも電子商品監視装置や電磁調理器の方がペースメーカー類に与える影響が大きいこと。

・本文では、電車内の優先席における携帯電話の使用に関する説明を行っていた。2007年当時、心臓ペースメーカーを装着している患者が若者が優先席の前で携帯電話を使用していることに不安を感じていた。当時、携帯電話の電波が心臓ペースメーカーに悪影響を及ぼすと考えられており、携帯電話はペースメーカーから22cm話すとされていた。しかし、それが必要なのは2012年のサービスが終了した古い機種だけである。

・ペースメーカー使用者にとって携帯電話の電波は危険なのかどうかを説明している。総務省が出した指針から「携帯電話はペースメーカーから22cm離す」とあり、危険性を感じつつも、実は2012年でサービス終了されているほとんど使われていない古い機種の携帯電話のみを指している。最近の機種は電波吸収フィルターがついていて、悪影響を及ぼすことはない。

誤解：

・電車の優先席付近がスマートフォンの電源を切る意味を実際に実際に起こっている患者や当事者の不安をあまり正確ではない医師の断言により、総務省が動き調査をした話。

価値的読解

・ペースメーカーに携帯電話の電波が影響をもたらすのは古い話。携帯電話よりも、影響があるのは「万引き防止用の電子商品監視装置」と「IH炊飯器」影響があっても、離れば元に戻る。電車内でのアナウンスで携帯電話の使用を控えるアナウンスは時代遅れ。

・ペースメーカーを装着した患者は携帯電話による電波によって身の危険を感じていた。しかし、今ではその問題は改善され、身体に影響を及ぼすことはない。総務省は携帯電話から22cm離すよう心がけることを呼びかけているが、技術が良くなった今ではあまりきにしなくても良いのかも知れない。ペースメーカー類に影響が大きいのは電子商品監視装置と電磁調理機器のIH炊飯器だそう。技術がよくなっていても、携帯電話は大丈夫になってもまだ弱点がある。それを改善し、弱点がなくなったペースメーカーができることを期待したい。

・携帯電話の電波は現在ではペースメーカーにほとんど影響しないのにもかかわらず、それを誤解している人が未だに居ることとそのために他人に優先席付近での携帯電話の使用の禁止を制限する人などの間違った知識を広めてしまう場合があるので、新しい情報を常に取り入れる事の大切さを知らせたい。

・どういうことを説明→電子機器と人間の関係性。解説→まったく影響がない。知らせ→日本の呼びかけはおかしい。

価値的読解ではないが、不適切な読解

・携帯電話は日本では電波による害があるといったアナウンスがあるが、あまり影響はなく最悪の環境下で影響が見られるが、他国ではアナウンスをするほど電波による被害はない。

・スマートフォンができてすぐの頃は見慣れていないため、危険だと思われていたが、実は現在ではそこまで危険ではなく、むしろ疑われていない物の方が影響が大きいということ。実は危険そうな物が危険ではなく、危険ではなさそうな物が危険なときがあるということを知らせているのだと思っ

※下線部は「価値的読解」や「価値的読解ではないが、不適切な読解」と判断した箇所。